

雑誌『国立公園』表紙にみる添景人物と自然風景の描かれ方

Representations of Natural Landscape and Staffage Persons Found on the Front Cover Picture of the "National park" Magazines

櫻井 宏樹\* 下村 彰男\* 小野 良平\* 横関 隆登\*

Hiroki SAKURAI Akio SHIMOMURA Ryohei ONO Takato YOKOSEKI

**Abstract:** This paper examines varieties and changes of represented natural landscape since the early 20th century, by surveying front cover photo collections of the "National park" magazines. The setting inside the pictures (e.g. the placement of human figures in the landscape, the number of respective elements in the picture, and so on) is assumed to indicate the changing tastes of modern populace as to natural landscape. According to the relationship between constituent elements of staffage and natural landscape, 107 staffage-person photographs were classified into 8 types. In comparison with nature of natural environment in the photo, appearance or disappearance of the type reflected perceptions of natural landscape. During the first half of the 20th century, the rich natural environment was the place where people enjoy modern recreation activities. Yet, in the following periods, the natural landscape meant something even rarer and maybe holier. Then, the very massiveness and grandeur of the landscape came to be emphasized. Yet again, now, after 1990s, it is thought that the concept of nature consists both of wilderness and man-made environment.

**Keywords:** National park, natural landscape, perception, staffage, imaginary behavior

**キーワード:** 国立公園, 自然風景, 認識, 添景, 仮想行動

1. 背景・目的

自然公園制度に代表される自然風景（ないし自然風景地）の保全問題は、周知のように「保護」と「利用」の両面が基本課題である。「保護」という観点では、対象となる自然景観、自然環境の価値評価のあり方は様々に取り込まれ、近年では生物多様性の維持という目的が自然公園法にも追加されるなど、生態系の保護の役割がより重視されつつある。一方で、「利用」の問題として「収容力」の議論も盛んで、特に「混雑感」などから自然風景地の社会的収容力を捉えようとする、体験の質にまで着目した研究も重ねられている<sup>1)</sup>。しかしその中で、自然風景地に人がその身を置く、というもっとも基本的な体験の特性やそのあり方については、自然と人との関わり方の重要な部分でありながら、少なくとも計画論的立場からは特段注目されてこなかった。

風景という環境体験は身体的感覚を介して行われ、触覚性を帯びた視覚によって風景が生まれていると言われている<sup>2)</sup>。そうした風景体験の特性を捉える手段として、絵画や写真に描かれた風景の分析が挙げられる。絵画や写真による風景体験は、仮想行動と深い関わりがある。山水画を初めとした風景画における人物は添景人物と呼ばれ、人の仮想の行動を象徴的に表わし、鑑賞者の心理的な画中参入を誘発すると言われている<sup>3)</sup>。添景人物に誘導されることで、視線は触感を帯び、仮想行動の場として風景が眺められる<sup>4)</sup>。

こうした添景人物が存在する風景は、戦前の自然風景地、水辺の写真において描かれているとの指摘がある<sup>5)</sup>。水辺の添景人物は、親水象徴として浅い水を連想させ、時として危険の象徴にもなる水への接近を仮想的に容易にしている。人物による安全性の象徴は、水辺以外の自然風景にも表れており、樋口（1993）<sup>7)</sup>によれば、人手の加わっていない自然の景観が添景人物の存在によって「生きられる景観」になっている。

このように、自然風景の絵や写真に描かれる人物の姿は、見る者の自然への仮想的な身の置き方を象徴していると考えられる。

したがって、仮想行動の表象としての添景人物に着目しながら、自然環境の風景としての描かれ方、そしてその風景の中への添景人物の描かれ方（自然環境がどのような風景体験の場、仮想行動の場として描かれているか）を見ることで、自然風景がどのように認識されているかについて把握することができると考えられる。つまり、風景とは多かれ少なかれ身体性を伴ったものであり、自己投影する添景人物の描かれ方は、その周辺に展開する風景に対する認識と重なっていると考えられる。

本研究では、自然風景写真を対象として、自然風景とそこに写し込まれた人物の描かれ方を分析整理し、添景人物を通して風景認識について把握する方法について考察するとともに、その結果を踏まえて昭和初期からの自然風景に対する認識の変化についても考察することを目的とする。なお自然公園の写真を扱った研究としては小林（2001）<sup>8)</sup>のものがあるが、添景人物については注目していない。

2. 方法・対象

(1) 対象

自然風景の写真を長期に扱っているものとして、本研究では1929（昭和4）年4月から現在まで刊行されている雑誌である『国立公園』（国立公園協会発行）の表紙から対象とする写真の抽出を行った。雑誌『国立公園』の表紙は写真を用いているものが多く、そのほとんどが自然風景の写真である。また、国立公園は我が国の自然風景の代表として位置づけられているため、その内容は自然風景に対する認識や価値観を一定程度反映していると考えられる。もちろん写真の内容は様々な要因を反映し、たとえば編集者や撮影者の嗜好や、各号のテーマ・記事の影響などが想定され、写真

表一 対象数と刊行数

年代	1929-43	1948-59	1960-69	1970-79	1980-89	1990-99	2000-12	合計
対象	16	16	16	18	21	11	9	107
刊行	130	106	101	100	100	100	130	767

単位 対象: 枚数 刊行: 回数

\*東京大学大学院農学生命科学研究科

の分析はこれらを含め基本的には国立公園協会という公園提供サイドの立場の範囲内のものである。しかし長期にわたり同じ形式で継続されている本事例の検討価値は高いと判断した。

表紙写真の枚数は、創刊号1929(昭和4)年4月から2012(平成23)年12月までに発行された雑誌の表紙全767枚から絵画等を除いた711枚である。そのうち、人物の写り込みが見られたものは121枚であった。なお、『国立公園』は1943(昭和18)年2月から1944(昭和19)年6月に『国土と健民』(国土健民会発行)に改題し、1944(昭和19)年7月から1948(昭和23)年7月まで休刊しているが、『国土と健民』の表紙写真では選定基準が異なる可能性が考えられたためそれらの表紙写真は対象には含めなかった。同様に大会等の事業の様子を写したもの、サムネイルを並べたものも除外し、残った107枚について対象とした(表-1)。対象とした107枚の写真について、年代ごとの枚数は1991-00年以降がやや少ない。なお、2003(平成15)年4月から2006(平成18)年12月の表紙が絵であることはその一因である。

## (2) 方法

### 1) 景観構成要素の抽出

写真の景観構成要素を抽出するために既往研究<sup>9)</sup>をふまえて景観把握モデルを設定した(図-1)。本研究では、写真の撮影者を視点と捉え、被写体である自然と人物を視対象とした。視対象は、自然風景写真という特徴をふまえて、主景は自然とし、添景を人物と設定した。自然には、視対象の主題になるもののほかに、主題に合わせて写された従的な自然があり、これを副景と設定した。

調査項目として、人物の人数と人物および自然と視点との距離関係を設定した(表-2)。人物の人数では、単独あるいはペアの行動として1~2人までを少数、3人以上のグループを多数と設定した。人物および自然と視点との距離関係は、基準に視距離を利用し、既往研究<sup>10)</sup>をふまえて至近景、近景、中景、遠景の4区分に設定した。広範囲に自然や人々の姿が見られる場合は、近景及び中景のように複数カウントした。主題性の判断基準としては、遠方に見えるものを風景の主題として扱った(図-2)。

### 2) 景観のタイプ分類

各写真の景観構成要素のデータを数量化Ⅲ類により分析し、得られたサンプルスコアをクラスター分析(ウォード法・ユークリッド平方距離)により分類した。

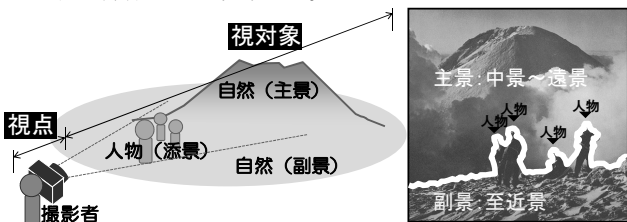


図-1 景観把握モデル

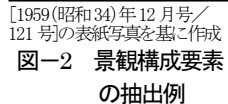


図-2 景観構成要素の抽出例  
[1959(昭和34)年12月号/121号]の表紙写真を基に作成

表-2 調査対象と調査項目

調査対象	調査項目	調査内容	確認数	割合	
人物 (添景)	人数	少数	1~2人が確認できる	45	42.1%
		多数	3人以上が確認できる	62	57.9%
	視点(撮影者)との距離関係	至近景	顔の表情が確認できる	23	21.5%
		近景	活動の内容が確認できる	39	36.4%
		中景	存在が確認できる	53	49.5%
		遠景		0	0.0%
自然	主対象	至近景	木の葉の特徴が確認できる等	25	23.4%
		近景	木の枝の広がり確認できる等	53	49.5%
		中景	木の樹冠が確認できる等	67	62.6%
		遠景	植生や地形の様子が確認できる等	51	47.7%
	副対象	至近景	木の葉の特徴が確認できる等	20	18.7%
		近景	木の枝の広がり確認できる等	21	19.6%
		中景	木の樹冠が確認できる等	14	13.1%
		遠景	植生や地形の様子が確認できる等	0	0.0%

表-3 数量化Ⅲ類の分析結果

カテゴリ	第1軸	第2軸	第3軸	第4軸
人至近	0.27	2.32	-1.71	-1.78
人近景	-0.35	0.84	1.34	1.91
人中景	-0.15	-1.60	-0.06	-0.98
人少数	-0.24	-0.58	-1.79	1.25
人多数	-0.02	0.29	1.36	-1.11
主至近	-1.33	1.88	-0.37	-0.59
主近景	-1.19	0.25	0.30	0.57
主中景	-0.71	-0.81	-0.25	-0.14
主遠景	1.02	-0.34	-0.13	0.04
副至近	2.05	0.85	-1.23	-0.01
副近景	2.18	0.46	0.36	1.26
副中景	2.29	-0.63	1.48	-0.24
寄与率	27.3%	21.0%	15.8%	13.2%

凡例 ■: 正負の最大値 ■: ±1.00以上の値

### 3) タイプの特徴および変遷の把握

タイプの特徴について、分類して得られたタイプごとに、人物の見え方(少数/多数)と人物の撮影者の位置(至近景/近景/中景)、自然の構図、分析対象写真の掲載年を整理し、それらを基に把握した。なお、自然の構図については、至近景を中心に写している「接近」、水平線まで見えるような中景・遠景を中心に写している「広域」、至近景から遠景までを写しており、主題となるような自然風景とあわせて写された自然風景が存在する「二段」、の3つを用いて整理を行った。また、タイプごとにその自然風景の原生性・二次性等の変遷を把握した。

### 4) 考察

添景人物を通じた風景認識の把握方法について考察を行った。その後、時代ごとにその時代を特徴づけるタイプを把握し、その時代の自然風景に対する認識について考察を行った。

## 3. 結果

### (1) 景観構成要素の抽出

景観構成要素の抽出結果は以下のとおりである(表-2)。

人物の見え方は、写真点数にして少数が45(42.1%)、多数が62(57.9%)である。人物と視点との距離関係は、至近景が23(21.5%)、近景が39(36.4%)、中景が53(49.5%)である。

自然のうち主対象と視点との距離関係は、至近景が25(23.4%)、近景が53(49.5%)、中景が67(62.6%)、遠景が51(47.7%)、副対象と視点との距離関係は、至近景が20(18.7%)、近景が21(19.6%)、中景が14(13.1%)、遠景が0(0.0%)である。

### (2) 景観のタイプ分類

各写真の景観構成要素データを整理し、数量化Ⅲ類を用いて分析した結果、77%の累積寄与率から4軸とカテゴリスコアが得られた(表-3)。

第1軸は、副景のカテゴリの値がいずれも大きく正の値を示し主景の至近景などが負の値を示していることから、「自然の構造の二段性」を表す軸、第2軸は、人物の至近景が大きく正の値を示し中景が大きく負の値を示していることから、「人物の写り込んだ距離」を表す軸、第3軸は、副景の中景と人物の近景と多数が正の値を示し人物の至近景と少数が大きく負の値を示していることから、「人物の多さ」を表す軸、第4軸は、人物の近景が高い正の値を示し人物の至近景と多数が負の値を示していることから、「人物の添景性⇔主題性」を表す軸と解釈された。

ここで得られたサンプルスコアによりクラスター分析(ウォード法・ユークリッド平方距離)を行い、ユークリッド平方距離4で分類した結果、8つのタイプに分けられた。各タイプは人物の写され方の特徴により、自然が主景副景構造を持たないもので「至近景」「少数近景」「多数近景」「少数中景」「多数中景」の5タイプ、自然が主景副景構造を持つもので「主副至近景」「主副近景」「主副中景」の3タイプと整理した。

### (3) タイプの特徴

それぞれのタイプを添景の人物の位置が視点に近いものから、その特徴や掲載年代、自然性を整理した(表-4, 表-5)。それぞれのタイプから1つずつ、縦横比を掲載時のそのままとして例を挙げている(図-3)。

それぞれのタイプについて、そのタイプ中での時代による多寡および自然の原生性・二次性をタイプの特徴とともに把握する。

#### i 至近景タイプ

掲載枚数は12枚である。人物が至近景に写し込まれている。レクリエーション性の強い活動が写されており、このタイプは戦前に多かったものの1950年から1980年の間には見られない。近年になって再び見られるようになってきているが、写されている自然風景は二次的自然となっている傾向がある。

#### ii 主副至近景タイプ

掲載枚数は11枚である。主景・副景構造をもち、こちらは至近景への人物写し込みタイプである。戦前から1980年頃までによく見られる傾向がある。基本的に主景、副景ともに原生的な自然であるが、1960年代、1970年代には副景が二次的な自然風景が見られている。

#### iii 少数近景タイプ

掲載枚数は10枚である。いわゆる添景としての少数の人物を近景に写し込んでおり、時代を通して見ることができる。二次的な自然は初期と近年に見られる。

#### iv 多数近景タイプ

掲載枚数は14枚である。自然的レクリエーションや自然とのふれあい活動が見られる。このタイプは時代を通して見られるが、1950年~80年頃に多く見られる。原生的・二次的自然風景を通して見られる。

#### v 主副近景タイプ

掲載枚数は11枚である。主景、副景の両者が遠近に配され、近景に人物が写されている。このタイプは比較的時代を通して見られる。主景、副景ともに原生的な自然となっており、二次的な自然風景は見られない。

#### vi 少数中景タイプ

掲載枚数は21枚である。1960年から1980年前後に多く掲載され、1984年を最後に突然見られなくなる。大きく広域に描かれた自然に対して小さな人間を点として写し込んでいる。二次的な自然風景を多く見ることができるが、このタイプが見られなくなる頃の1980年代では原生的な自然風景のみとなる。

#### vii 多数中景タイプ

掲載枚数は19枚である。中景域に人物が存在するが、人数が多いタイプで、戦前には見られない。タイプが出現する1960年頃と近年では二次的な自然風景が多いが、その間の1970年代、1980年代では原生的な自然のみである。

#### viii 主副中景タイプ

掲載枚数は9枚である。主景・副景構造をもつ中景タイプで、こちらも戦後になってから見られ始める。主景は原生的な自然であり、手前の副景については、近年二次的な自然のものが多くなっている傾向がある。

表-4 タイプの特徴

タイプ名	人数		人物の距離			自然の構図		
	少数	多数	至近	近景	中景	接近	広域	二段
i 至近景			○			○		
ii 主副至近景			○					○
iii 少数近景	○			○				
iv 多数近景		○		○				
v 主副近景				○				○
vi 少数中景	○				○		○	
vii 多数中景		○			○		○	
viii 主副中景					○			○

凡例 ○: 全てに該当する特徴

表-5 タイプの掲載年代と自然性

タイプ名	1929-34	1935-9	1940-4	1945-9	1950-4	1955-9	1960-4	1965-9	1970-4	1975-9	1980-4	1985-9	1990-4	1995-9	2000-4	2005-12	枚数
i 至近景	*	*	***		+						*			*	***	++	12
ii 主副至近景		**	*	休竹の期間を含む	*	*	++			++	*			*		*	11
iii 少数近景	+	*	*		*	*	*			*		+				++	10
iv 多数近景	*	*				***	*	**	++	*	*		*	+		*	14
v 主副近景	*				***		*		*	**		***		*		*	11
vi 少数中景	+	*			++		+++	**	++	++++	*****						21
vii 多数中景						+	*	+++	**	**	**	****	*	++		+	19
viii 主副中景						**	+					**	++		++	+	9

凡例 \*: 原生的な自然 +: 二次的な自然 ■: 原生的な自然のみが複数見られる掲載年代 ■: 二次的な自然が見られる掲載年代



図-3 タイプの写真例

#### 4. 考察

##### (1) 添景人物を通じた風景認識の把握方法の考察

数量化Ⅲ類での分析において、自然の構図が解釈される第1軸に続き、第2軸として添景人物の距離と解釈できる軸が出ている。また、続けて第3軸に人数として解釈できる軸があり、それらにより風景認識にタイプごとの差が表れているものと思われる。

添景人物のしぐさに触発され、仮想的に風景が眺められると言われる<sup>11)</sup>。また、周囲の描写に具象性があることが仮想行動を容易にすることに重要な働きをしているとされる<sup>12)</sup>。したがって写真においては、行動や周囲の様子を見て分かることが難しい、視点から遠い添景人物より、それらを知れる視点近くの添景人物の方が仮想行動に繋がりやすく、風景における身体性の高さや添景人物の視点との近さは連動する傾向にあるということが考えられる。仮想行動によって環境を身体的な眼で眺めることで、その環境はより自分の場所として、触感覚のあるものになるであろう。

i 至近景タイプのように添景人物が至近景のように十分に視点に近づけば、表情を含めた様子を見ることが出来る。人物が視点に近いほど表情が強調され、レクリエーションのような楽しさを伝える自然の利用との関係が強く、身体性が高いと考えられる。

v 少数中景タイプやvii 多数中景タイプのように添景人物が中景のように遠方に写される場合は、添景人物のいる環境の対象化がされているだろう。写真では視点から遠くなるほど具象性を高めるのは難しくなり、至近景域のもので見られるような身体性については相対的に低いものとみられる。中景域に写された人物について分かる情報は大きさや数に限られている。少数の人物が用いられているものは、人の大きさに対する自然の大きさの持つ意味が強く、一方で遠くに多くの人物が写り込んでいるものは人数が多いこと、人の数が持つ意味が強いと考えられる。

自然風景が主景と副景の構造を持つ場合、今回の分析では人物は手前である副景に写り込んでいる。人物の写り込んでいる手前の自然風景と、人物のいない遠方の自然風景を対比することで、遠方の自然風景が他者性の強い場所として、象徴的に描かれている。添景はその場所からの風景を仮想体験させる<sup>13)</sup>と言われている。ii 主副至近景タイプのように人物が視点の近くに写されているものは眺望を伴った仮想行動を誘発し、副景の身体性と主景の象徴性が強調されると考えられる。一方で、viii 主副中景タイプのように添景人物が遠方に写るものでは人物の存在する自然風景も対象化がされていると考えられる。

##### (2) 自然風景に対する認識の動向の考察

タイプ中での時代による多寡による特徴から、自然風景に対する認識の動向を考察する。

戦前から1950年頃までの時代に多いという特徴を持つのは、i 至近景タイプ ii 主副至近景タイプのように、原生的な自然の至近景に添景人物が描かれるものである。添景人物によって原生的な自然の中でのレクリエーションの楽しさを強調し、仮想体験による原生的な自然風景の身体的な認識を容易にしている。原生的な自然に対する、楽しむ対象、さらにはレクリエーションの場として原生的な自然が描かれていたことがうかがえる。叶わない名山めぐりを仮想体験によって楽しむ臥遊という伝統<sup>14)</sup>とも通じる場所があり、近代的レクリエーションに対するあこがれを誘発しようというものであったことがうかがわれる。一方、この時代に二次的な自然がみられるものではvi 少数中景タイプと i 至近景タイプがあり、二次的な風景の広大さを評価し、対象化していると同時に身体性も持っていたと考えられる。

1960年代頃では、主景・副景の構造をもつタイプに特徴がある。両者とも原生的な自然であるviii 主副中景タイプが見られ、一方でii 主副至近景タイプでは副景が二次的な自然風景が特徴的に見られる。人の空間と原生的な自然とを対比することで強く原生的な自

然の対象化が行われている。他者性が普遍化している<sup>15)</sup>と考えれば、主景の自然は聖域化した存在として見られていた可能性が考えられる。また、この時期からはi 至近景タイプが見られなくなる。原生的な自然風景地は保護の対象として認識され、身体的感覚をもって捉えられるものとは異なっていたことが想像される。

その後、1970年から1980年頃には原生的な自然風景のvi 少数中景タイプが多くなる。小さな点の人物と広大な原生的な自然とを対比させ、原生自然の壮大さに対する価値評価とともに対象化が進んだと考えられる。また、vii 多数中景タイプに原生的なものが多いことも特徴である。自然に多数の人々で訪れることにも評価があったことがうかがわれる。自然風景地がマスツーリズムの対象として認識されていた面が見えていとも思える。

1990年以降では、vi 少数中景タイプの添景が姿を消す。自然の価値認識の潮流は、スケール感や大きさから他の面へと移ったと考えられる。この時期に特徴があるものとしてviii 主副中景タイプがあり、副景が二次的な自然に変化している。遠方に見える原生的な自然を象徴的に捉えながら、同時に身近な自然についても対象化し、価値を見出していると考えられる。また、二次的な自然風景の保護の向きが見える一方で、i 至近景タイプが再び見られている。保護と同時に、二次的な自然の利用も注目されている様子が見えるとともに、身近な自然に対する積極的なアピールが出てきていることも見えるということになる。

#### 5. まとめ

自然風景写真に写された人物を分析すると、自然風景とそこに写り込む人物との関係には時代的な傾向があることが分かった。視点から添景人物の距離と風景の身体性との間には関係性があると見られ、それは仮想行動と結びついている。

自然風景と人物との関係から導かれる自然風景に対する認識には、身体性を持ちつつ二次的な自然を評価する一方で、原生的な自然では利用に価値が置かれ、身体性の高い存在であったことも考えられる。1950年頃までから、原生的な自然を保護するものと認識し対象化した1960年頃、原生的な自然の壮大さの価値を見出し、その対象化を進めた1970年、1980年頃を経て、現代では自然を原生的なものとなりが関与したものが構造化した存在と捉え対象化する中で、身近な自然が強調され、高い身体性がある様子も見え、という傾向があった。

本研究では、仮想行動の表象として写真の添景人物に着目して身体性に関わる自然風景の認識とその把握の方法について考察した。実際の風景体験をより身体性のあるものにしていく方策についてはさらに計画論的に取り組むべき課題である。

#### 補注及び引用文献

- 1) 小林昭裕・愛甲哲也編 (2008) : 自然公園シリーズ2 利用者の行動と体験 : 古今書院, 262pp
- 2) 中村良夫 (2010) : 都市をつくる風景「場所」と「身体」をつなぐもの : 藤原書店, 323pp
- 3) 中村良夫 (1982) : 風景学入門 : 中央公論新社, 244pp
- 4) 篠原修 (2007) : 景観用語辞典 : 彰国社, 355pp
- 5) 中村良夫 (2001) : 風景学・実践篇 : 中央公論新社, 237pp
- 6) 下村彰男 (2003) : 自然風景の多様性保全 : 国立公園 (619), 4-8
- 7) 樋口忠彦 (1993) : 日本の景観 : 筑摩書房, 291pp
- 8) 小林昭裕 (2001) : 利用者向けの印刷物に掲載された写真にみられる景観資源の特徴と変化 阿寒国立公園を事例として : 国立公園 (619), 4-8
- 9) 前掲書 4)
- 10) 前掲書 4)
- 11) 前掲書 5)
- 12) 前掲書 4)
- 13) 前掲書 3)
- 14) 前掲書 4)
- 15) 前掲書 4)